

(開始時刻 18:00)

○大西座長 それでは、ただいまより第1回「フロンティア分科会」を開催させていただきます。

私は野田総理より御指名をいただき、座長として司会進行を務めさせていただきます。東京大学大学院工学系研究科教授の大西隆と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、まず、野田総理からごあいさつをいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○野田総理大臣 第1回目の分科会の開催に当たりまして、一言ごあいさつ申し上げたいと思います。

まずは、それぞれメンバーをお引き受けいただきまして、本当にありがとうございました。今日、衆議院で予算委員会がございまして、民主党の仙谷議員から御質問をいただいたのですが、1月6日の『ニューヨークタイムズ』に出たコラムによると、日本は失われた20年と言われているけれども、結構パフォーマンスがいいのではないかと失業率水準、あるいは更に伸びている平均寿命など、いろいろな切り口があると思うのですが、例えばミシュランの最高級の評価は、レストランは日本は16軒もあって、パリは10軒しかないとか、いいところ取りですが、そういう評価をいただいています。

一方で、私はむしろ今日の答弁で申し上げたのですが、今年の夏の『エコノミスト』に出た評価で、先送りをする政治の象徴みたいに日本が扱われたことの方が気にかかっています。やはりこの20年、今日より明日がよくなると希望を持てる状況ではないのです。特に高度経済成長を知らない、『三丁目の夕日』の時代を知らない人たちが多くなってきて、加えて、ましてやバブルの最盛期を知らない人たちもいる。バブル崩壊後に生まれたような世代においては、今日より明日はよくなるという実感が持てないのです。

そこを突き破っていくような構想を是非打ち出していきたいと思っております。野田内閣の最大の課題は勿論、震災からの復旧・復興と原発事故との闘いと経済の再生です。その行き着く先を2050年くらいまでにらんだとき、まさに課題がいっぱいあります。高齢化という問題もあります。こういう原発の事故が起こったわけですから、より再生可能エネルギーに頼っていかなければいけません。一方で省エネも徹底するというエネルギー効率の改善を更に進めるなど、課題を克服する必要もあります。

どの国にとってもこれらの課題はこれから直面をするはずでございしますので、日本がそのフロントランナーとなって打ち破っていくことによって、逆にいろいろなもので日本が教訓として得たものが世界のモデルになっていくような話や、あるいはもともと宇宙や海洋など、フロンティアはいっぱいあります。そういうフロンティアを先頭になって開発することによって、まさに世界の先頭に立つような元気な日本をもう一回つくっていきたいと思っています。

間違いなくアジア太平洋の時代になりますけれども、周りはこれからどんどん巨大な中

間層が増えたり、あるいは膨大なインフラ需要があったり、元気になる国が多いんですが、せつかく繁栄の中心がアジア太平洋に来るときに、このまま日本が元気のない老大国になってはいけないと思います。そのブレークスルーを是非皆様のお知恵も借りながら、まとめていきたいと思っておりますので、その意味からも委員は、座長及び座長代理は除いて、すべて私より若い人ということでお願いをさせていただきました。多少やんちゃな議論になってもいいと思いますので、思い切ってそれぞれの分野での御提供をいただければと思います。どうぞよろしく申し上げます。

○大西座長 ありがとうございます。

(報道関係者退室)

○大西座長 それでは、はじめに資料3で委員の皆様の名簿を御確認いただきたいと思っております。本日は御都合で中西委員が少し遅れて到着する予定となっております。

既に総理から御指名をいただいているとおり、小林光慶應義塾大学政策・メディア研究科教授に座長代理をお願いしています。

それから、永久寿夫株式会社 PHP 研究所代表取締役専務に事務局長をお願いすることになっています。よろしく申し上げます。

また、分科会の下に、繁栄、幸福、叡智、平和の4つのフロンティアに関する部会を設置することとしています。部会の構成員については、お手元の資料4に配付しておりますので、御確認をいただきたいと思っております。

座長、座長代理、事務局長を除いた分科会の委員の皆様には分担して、各部会の部会長、部会長代理をお願いすることにしております。既に御承諾をいただいているところですが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

運営要領については、お手元に配付してあるとおりの内容で運営してまいりたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

それでは、今日が1回目の会合ですので、はじめに私からフロンティア分科会の議論に向けて、考え方を説明させていただきます。その後、事務局長から資料6に基づく説明と一連の御説明をした後、皆様からの御意見を総理が御着席の間にできるだけお聞かせいただきたいと思っております。

資料5であります。この中で私がこのフロンティア分科会をこういう議論の場にしたいということを説明させていただきます。

1 ページ、やや簡略したポンチ絵であります。こんな議論の構造かと思っております。左下に現状認識がございます。現状認識から、どんな時代の変化が2050年に向かって進もうとしているのかを整理して、BAUこのトレンドが流れていった場合に想定される将来像(BAU)を描きます。これは理想的な姿、あるべき姿ではないので、あるべき姿を基に考えることが一つ革新的なポイントになると思っております。

しかし、2050年はなかなか遠いので、少しそれを手前に引き寄せて、このあるべき2050年の姿から描かれる2025年の将来像をもう一つ描いてみよう。今から13年を政策の射

程距離として、2025年に向けた方向性を議論する。⑤がこのフロンティア分科会のアウトプットのエッセンスとなるのではないかと考えているわけです。①から②に至るところで、5つの主要な変化というのを考えてみました。

次のページが人口の変化ということであり、日本の人口はピークを超えて、これから線対称に減少していくということは既に承知のとおりですが、この赤で書いたのが老年従属人口指数と言われるもので、分子に65歳の人口、分母に15～64歳の人口をとったものです。

一般的に言えば、若い世代がどのくらいの高齢者を背負っているかという関係を示しますが、明治以来9%程度で安定してきたものが、1970年くらいから急速に増加して、2080年くらいには80%を超える。若い世代15～64歳が10人いると、65歳の人が8.5人いるような社会になるということで、これは特に年金、福祉という領域で大きな影響を持っていると考えると、日本社会の政策の在り方に大きな影響を与えるということでございます。

右の下には、都市においても都市の拡散傾向が進んでいるということで、人口集中地区の推移をこれから今日までのデータであります、描いています。

次のページが2つ目の変化で、アジア化の変化を取り上げました。グラフは世界の都市人口がどういうふうな大陸ごとに分布をしているかです。60年前の1950年には、ヨーロッパと北米の都市に半数以上の都市人口が集中していたものが、2050年にはアジアが54%、アフリカが19%ということで、7割を超える人口がアジアとアフリカの都市に住むということ。北米、ヨーロッパのシェアは15%に下がるということで、アジアの時代が来るとことであります。

次のページは、低炭素化で、低炭素化が地球温暖化防止のために非常に重視されていると。これも将来を規定する大きな変化であります。

次のページは、ガバナンスの変化。これは国内に目を転ずると、地方分権あるいは参加型のガバナンスというのが非常に浸透しつつあるということで、ガバナンスの在り方が変わろうとしている。国際的にもアジア太平洋地域で、多国間で重層的な合意形成ということが課題になっているということで、ガバナンスについても変化が訪れているということでもあります。

最後の5つ目が、特に東日本大震災に端を発して、総理もこれからの重要施策とおっしゃったわけですが、災害・エネルギー分野でも大きな変化が起こっているということです。特に自然災害と日本は減災という考え方に基づいて、共存していくことが必要です。そのことに端を発して、災害大国における一極集中構造の危険性も再認識されてきているというわけです。更にエネルギーの在り方についても、原子力エネルギーというのがこうなると制御不能に陥ることの危険性が指定されているということで、災害・エネルギー分野、特に今回の災害を機に議論が集まっているところで、将来の在り方の重要な変化をもたらすのではないかと考えております。

最後のページですが、そうした5つの変化というものを、さっき言った、やや変形的な

バックキャストイングによって、将来のあるべき姿を導いて、その実現に向けて何がキーになるのか。そのフロンティアを設定していこうというのが、このフロンティア分科会の役割であると。フロンティアの諸分野は右側に書いてありますが、繁栄、幸福、叡智、平和という4つの分野でとりあえず議論をしていくということになりますが、切り方が少し、繁栄、幸福、平和と叡智の間に差があると。叡智はある意味ですべての分野に共通するような性格を持っているということでもあります。その辺の議論の重層的な組み合わせについても、今後、分科会の中で議論をして、工夫をしていきたいと思っております。

簡単ですけれども、第1回にあたっての私の考え方は以上でございます。御清聴をありがとうございました。

それでは、次に事務局長から、フロンティア分科会について及び部会について、議論の進め方を御説明いただきたいと存じます。

○永久事務局長 資料6をご覧くださいと思います。

まず「1. 分科会の使命」が書かれております。これは先ほど総理からもお話がありましたけれども、日本人が「希望と誇りある日本」を取り戻す。そういう目的を持って、中長期的な日本の目指すべき国の将来像を示すということが、この使命でございます。そして、そのためにここにありますように、宇宙や海洋の開発にとどまらず、経済、社会、科学技術、教育、国際関係など多岐にわたる分野における新たな可能性を見つけていく。それを切り開いていくというのがこの分科会の使命です。

進め方については、今、座長の方からお話がありましたけれども、2050年までを視野に入れた我が国の将来像を描き、国際的、社会的環境が大きく変化すると予想されます2025年に向けた方向性を検討し、中長期ビジョンをとりまとめるということでございます。また、その成果は国家戦略会議が本年半ばごろを目途に策定し、日本再生戦略に資するものにしていくということを目的しております。

「2. 議論のアプローチ」です。これも座長のお話にありましたが、現在の状況から日本の将来予測を行うことをまず行って、その後、日本が目指すべき姿というものを描いていこうということです。このプロセスの中で恐らく異なる価値観とか、今まで考えたことのなかったような新しい考え方というものが出てくる可能性もあります。更にその後目指すべき具体的な目標を設定していく。更にそれを実現するために、新たに切り開くべき領域、フロンティアを検討していく。そのフロンティアを検討した後に、そのプロセスにおけるボトルネックというもの。何が障害になっているのかということを検討していく。それを乗り越えるために、何を具体的にしていく必要があるのかということを検討していくということです。各フロンティアの領域とその他の領域との関連性をじっくり考えながら、全体的にストーリーのあるものに仕上げていきたいということです。

「3. 各部会の役割」です。次のページにありますように、幾つか書かれております。これについては、皆様既に御案内のことだと思いますので割愛いたしますが、既存の課題解決型のアプローチではございません。目標課題設定から始めるアプローチでございませ

て、検討すべき項目も含めて、部会で議論をしていただきたいと思います。と考えております。

最後のページをご覧いただきたいと思いますけれども、大体のスケジュール（案）でございまして。部会に関しましては、月2回ほど開催させていただいて、分科会に関しましては、その2回終わった後に月1回くらい開催していきたいと考えております。中間報告につきましては、5月の連休明けくらい。最終報告は6月末くらいまでにまとめるというような予定でおります。

以上でございます。

○大西座長 どうもありがとうございました。

それでは、今日は1回目ということですので、委員の皆様から自己紹介を兼ねて、本分科会及び部会の開催に当たって、一言ずつごあいさつをいただければと思います。時間の関係でお一人3分くらいということで、約900字ですね。

まず、フロンティア分科会の座長代理を務めていただく小林座長代理からお願いします。

○小林座長代理 ありがとうございます。座長代理ということで、大変重い任務をちょうだいいたしました。がんばりたいと思います。

先ほど、野田総理からお話を賜りましたけれども、人類のフロンティアの先頭に立って切り開いていく元気な日本というイメージは大変わかります。また、座長の方から大変簡潔に、これまた直面しているいろいろな課題とブレークスルーの方向も整理をいただきまして、大変感謝をしております。

私自身でございますが、先ほど総理の方からは、座長及び座長代理を除き総理よりも若いということでございましたけれども、私は残念ながら、本当に申し訳ございません。お許しいただきたいと思います。

ずっと環境ばかりをやってきております。環境一筋ということで来ております。今やっておりますのは、エコビジネスの振興とか、水俣病で被害を受けました地域の再生ということで、野田総理にも大変助けていただいておりますし、座長にはいろいろな地域再生の御指導を現地で賜っているところでございます。

地域の再生、原因企業の責任の果たさせ方とかを今までやってきましたが、今回の震災復興は大変なことだということは、その経験からも強く思っております。いずれそれを克服していかなければいけませんし、高齢化とか為替とか、いろいろなことがございます。その中でどうやったらいいのかなということですが、是非この会議で訴えたいと思っておりますのは、自然と徹底して共生するブランドを日本でつくっていくということが、これだけの災害を経験した日本のできることなのかなと思っております。単に課題を克服するというだけではなくて、新しいものをつくるということですが、自然に生かされる人類、人間といったような姿が一番近いのが日本だと思います。

そういう意味で例えばビジネス、今、学校でもやっておりますけれども、どんなものも全部環境ビジネスだと思います。あらゆる製品、サービスの環境性能をよくしていただくというようなことでも、足元からできることがあると思います。

時間の関係で1点だけ申し上げたいと思いますが、大学で外国の学生さんが物すごく熱心に日本の環境のことなどを勉強されます。そういうふうに見ますと、例えば水俣病など直接学んでいただけることが日本にはたくさんある。そういう意味で大学院レベルくらいの学生さんをアジアからたくさん、極端に言えばODAでもいいと思いますが、呼んでいただければ、アメリカの大学などよりも正直、学費は日本の方が安いので、競争力があるのではないかと思いますし、そういう意味でアジアと一緒に、先ほどの総理のおっしゃったフロンティアを切り開いていく日本というのができるのではないかと考えております。

環境も一つのテーマだと思いますが、その観点で貢献させていただきたいと思います。こういった機会を与えていただきまして、ありがとうございました。

○大西座長 ありがとうございました。

それでは、柳川委員をお願いします。

○柳川委員 私の専門は経済学ですけれども、先ほど総理がおっしゃったように、経済社会を繁栄させていって、明るい希望のある未来にしていくにはどうしたらいいかという観点で、是非いい報告書を仕上げられればと思っております。

個人的には重要なポイントは2つあると思っております。1つは、先ほど座長の方からお話がありましたけれども、人口が減っていくということは、成長のポテンシャルにマイナスです。労働人口が増えていかないと、なかなかポテンシャルの成長につながらないので、労働人口をいかに増やしていくかということが中長期的には大事だろうと思っております。

短期的には、実は違う方向になっていまして、失業問題があって、働く場所がないということになっており、この短期と長期の方向性のずれというものを解消していく必要があって、それはやはりある種の人材戦略によって人材のミスマッチを解消していくという方向性なのだろうと思っております。

もう一つは、中長期的に考えますと、国も随分変わっていくのだろうと思っております。50年先という話でいくと、日本国民がここにいるかどうかかわからないし、あるいは日本の企業だってここにいるかどうかかわからないという社会の中で、果たしてここいかに繁栄を持っていくかと考えますと、労働人口を増やすという関連でいくと、内外の人材を積極的にここに集うようにする。そういう求心力を持った社会にしていかなければいけない。その点においては、日本の資本主義をもっと高度化して、みんながここでいろいろと活動をしやすいということが必要だろうと思っております。

2番目は、そのイノベーションを今後どんどんやっていかなければいけなくて、かつ明るい希望が持てるようにするためには、明るくリスクを取ることが不可欠だと思います。課題を見つけていく上で、昔のキャッチアップ型だと方向性あって、あちらに行けば、ほぼ成功だというのがわかったのですが、日本がフロンティアにいるため、あっちに行けばいいということがわかっているわけではないのです。そのため、いい方向を探していかなければいけない。

そうすると、全員が成功はできないのです。アップルが話題になっていますけれども、アップルの成功の裏側には99%の失敗があるわけで、失敗があつてこそアップルなのです。ですから、どんどん失敗させる。99人の失敗をつくらせる。それを恐れない。つまり、そういう失敗をした人がいても、社会的に見れば、そういう人たちが希望を持てる。何度もチャレンジできる。こういうような社会システムをつくっていかなければいけないのではないか。抽象的な話ですけれども、そういうものを少し具体的に見せられればと思っております。

以上でございます。

○大西座長 ありがとうございます。

武田委員、お願いします。

○武田委員 どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、こうした機会をいただきまして、どうもありがとうございます。

委員を務めさせていただくのに当たって考えたことが2点ほどございます。

1つは、日本の強みを忘れないということで、たまたま冒頭、総理の方からお話がありましたとおり、とかく日本は失われた20年ということで、一言で言うと、経済の面では暗く描きやすい部分があると思います。ただ、今回の震災を通じて、私が日ごろマクロ経済動向を見ていて強く思ったのが、日本の企業の底力、日本の民間力というのは非常に強い。つまり、そのサプライチェーンが大きく寸断したにもかかわらず、マクロ全体の工業生産などを見ていると、かなり早いペースで夏場にかけて95%くらい復旧したということがあります。勿論、まだまだ被災地では非常に困難に直面している方もいらっしゃいますし、原発事故という長い課題にも直面しているわけではございますけれども、底力がある部分、あるいは明るい部分、強みがある部分というところも十分考慮してまいりたいと思います。

先進国の中で見ますと、生産年齢人口1人当たりで見たGDPというのは、実はあまり低くありません。一生懸命働いている我々生産年齢人口が産み出している1人当たりのGDPはなお高いということで、そこをどうやったら伸ばしていけるか。あるいは維持していけるか。そういった部分を考えていきたいというのが1つ目でございます。

2点目は、1点目と若干逆行する話にはなりますけれども、さはさりながら、現実というのを直視していかなければいけないという部分は、強く認識しております。これまでも話は何回か出ましたとおり、高齢化が進んでいくこと。これはもう不可避でございますし、財源の制約ですね。やりたいことは多数ございますけれども、これから財源が限られている中で、どこに集中していくか、選択していくかというのは、ちょうど部会が4つに分かれているので、それぞれの部会からいろいろとやりたいことが出てくると思いますが、最後はこのフロンティア分科会の中で、制限があつても可能なこと、例えば今ある資源の再配分であるとか、ボトルネックになっているような制度、あるいは制度というよりはむしろ慣習といった部分は、日本について大いにあると思いますので、そういったところを議

論していければと思います。

つまり1点目と2点目で申し上げたかったことは、強い面と制限という面の両面を直視しながら、そんなことは全く不可能であるというようにとらえられないような、現実的には実現可能な2050年といったものを示して、それによって今の若い人たちが明るい将来、今日よりは明日が明るいと感じてもらえる、クリエイティビリティのある提言ができればいいなと感じております。

最後になりますが、皆さんに大変お世話になるかと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

○大西座長 どうもありがとうございました。

総理が18時40分くらいに。

○野田総理大臣 大丈夫です。

○大西座長 それでは、阿部委員、お願いします。

○阿部委員 まず、このような機会をいただき、大変光栄に思っております。ありがとうございます。

私の専門は貧困と社会的排除ですので、常日ごろ、どちらかと言うと日本の暗い面ばかり見てきております。また、暗いような面のデータを集めるのが私の仕事でございますので、人々で食料を買えなかった人が何%いるのかですとか、そのようなことを集めているわけで、常日ごろ、非常に暗くなってしまうようなことばかり考えているわけでございます。

私もいろいろところで貧困問題や格差問題を直視しなければいけない、再分配をしなければいけないということを講演させていただく機会があるのですが、そこでも、特にこの数か月、一般市民の方から言われることは、それはそうだけれども、ない人はないだろうと。私たちは何もできません。これ以上できないから、もうしようがないです、あきらめます。貧困問題があることはわかっているのですが、もうどうしようもないという方がすごく多くなってきたということをすごく感じております。

今の時点から、この問題をどうやって立ち向かっていくかということを考えると、本当に絶望的な気分になってしまうんですけども、この2050年からバックトラックしてやっていくと。2050年にここに達するには今、何をしなければならぬとやっていく方法は、もしかしたら、もう絶望的な気持ちになりがちなところをブレークスルーする一つの新しいやり方ではないかと思って、私としては非常に期待をしております。

これが日本の一般市民の方々にもわかっていただけるように、そうだ、そのためには動こう、あきらめるのではなくて動きましょうという気分になっていただけるようなものになれば、素晴らしいことだと思っております。

あと1点、先ほど話があった、日本の強みという点に立ち返りたいのですが、経済成長が幸福を約束するものではないということは、もうすべての人がだんだん認識してきたと

ころかと思えますし、今回この幸福の部会をわざわざ設けていただいたということも、そのことが本当にトップのレベルで認識されてきたのかなと、私としては非常によいことだと思うわけです。

ただ、その中で日本のよいところと言ったときに、このごろは絆ですとか、関係性、コミュニティという言葉が散々言われますけれども、日本はまだそれが残っている社会なんです。同じぐらいの格差や貧困のある国に比べまして、日本はまだ断然に社会の信用性ですとか、安全ですとか、人々の信頼度ですとか、私の外国の友だちは、日本の子どもが一人で電車に乗っているのを見ると非常に驚きます。その社会があるんです。

これは失われつつあるんだという危機感を基に、これを残すためには何が必要かということ、2050年の中に、それが失われた社会というものを見つめる覚悟が日本にあるのかというところを説いていきたいと思っております。

若干長くなりましたが、皆様、これからいろいろと御迷惑をかけるかと思えますけれども、よろしく願いいたします。

○大西座長 ありがとうございます。

上村委員、お願いします。

○上村委員 よろしく願いいたします。このような委員にさせていただいて、ありがとうございます。

私の専門は財政学です。今、財政の世界で明るい展望は非常に難しいのですが、2050年ということ視野に入れた場合、ひとつは、着実に財政再建を達成していかないといけない。もう一つは、社会保障の水準を維持していくということがあると思います。ただ、その中で現在の財政の負担配分、もしくは受益の配分が本当に社会的な構成を達成できているのかというところは、見ていかないといけないなと思います。

今、貧困の話があったわけですがけれども、現在はやはり貧困の問題があり、そこをどう考えるのか。あとは平等なチャンスが本当に与えられているのかどうかというところは、非常に大事だと思います。

もう一つは、選挙権を持たない子ども世代、もしくはまだ生まれていない世代の人たちのことを我々は考えないといけない。そういったものを財政は背負っていると思うし、かつ2050年を考えたら、まさに問題はそこにあると考えながら、この会議に参加したと思います。

最後ですけれども、財政制約が非常にきついで、財源を伴う政策については、プライオリティを付けていくことが非常に大事だと思います。恐らく分科会である程度、そういう意識を持って、話し合いが行われれば、この政策は非常に大事だということのプライオリティ付けができれば、非常にいい会議になるのではないかと個人的には思っています。どうぞよろしく願いいたします。

○大西座長 どうもありがとうございます。

それでは、荻部委員、お願いします。

○荻部委員 よろしく申し上げます。

私は東京大学で日本政治思想史を本来研究しておりまして、これまでやってきた主要なテーマの一つが、教養という問題です。つまり、単に知識とか情報とかとは区別された、人の物の考え方の基盤となるような教養が何なのかを研究したことがあって、そこでは、教養というのは、先ほど人と人の絆が出てきましたが、例えばそういうものを支えながら、究極的には広い意味での政治秩序を支えていく政治的教養と読み替えてみたらどうかという議論をしたことがありまして、恐らくそれがあって、ここにお声をかけていただいたのだと思います。

ただ、そうした持論とは別に、どういう方針で臨みたいかというのは、2つほど考えております。

1つは、多分「叡智のフロンティア部会」は、それこそ文化芸術から、学問、知識、恐らく教育の問題まで非常に幅広いものを対象として含みますが、往々にして、文化芸術や学問はさまざまな専門に分かれる中で、どれを伸ばしたらいいかという議論に終始してしまいます。これはこれで悪いことではないのですが、これは逆にこの場でやらなくてもできる。つまり、そういうことであれば、それぞれの学問の分野なり、知識の分野、文化の分野で、それぞれ頑張っていますので、そういうものをとにかく支えてあげるというやり方を取ればいい。

今、欠けているのは、その部分ではなくて、学問であれば、さまざまに専門が分かれています、それぞれに高度な技術なり成果なりが上がっている。それとほかの分野との交流を活発にすることで、文科系術であっても、いろいろなジャンルの間での交流をつくって、普通であれば生まれられないような結合が生じて、そして、新しいものが生み出されていく。そういう知恵であるとか、制度的な枠組みをつくることを少し念頭に置いて議論をしたいと思っています。

2つ目ですが、この4つの部会の中で、「叡智のフロンティア部会」は最も端的には効果が表れにくいジャンルです。政策のコストベネフィットで言うと、ベネフィットがなかなか表れにくいし、どうやって量ったらいいのかわからない。それがゆえに自由にさまざまなビジョンを出すことができるというメリットもあるわけですが、下手をすると単なる空理空論の放談会に終わってしまう危険性もある。

ですから、そののところは、現実を超えて新しいものを求めるビジョンを考えながら、同時に現実の課題として、それは何なのか。何を達成すればいいのかと落としていくように、議論を進めていくことができればよいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

○大西座長 どうもありがとうございました。

隠岐委員、お願いします。

○隠岐委員 このたびは大変栄えある任務をいただきまして、どうもありがとうございました。

私は科学技術史を専攻としておりまして、基本的には歴史家です。それも 18 世紀のフランスというものをやっております、かなり浮世離れしたところと思われるかもしれませんが、そのスパンで物を見ているので、このたびはこのような機会に招いていただいて、非常に感慨を強くしております。というのも、歴史の節目に立ち会っているような気持ちになったからであります。

私の対象としている時代というのは、基本的には科学アカデミーというものを研究しているのですが、自然科学者という職業が形を取ってきた時代に当たります。その時代は人間が明日は進歩するという、割と力強い信念みたいなものが生まれて、同時にそれゆえに後世につながる問題も生まれたという複雑な時代であります。勿論いろいろな節目の時代があったんですけども、200 年以上経ちまして、今またちょうど本当に課題を前にしていると言いますか、大きな転換点になると感じている。

そこで私は、自然科学や、人文科学、芸術といったものの発展について、我々の社会はともすれば、一つの方向に走るという戦略を立てて、何かそれに向かって力を集中するといった発想に、必要なのですが、とらわれ過ぎていなかったかということをよく考えます。先ほどの素晴らしいビジョンを示していただいたので、私は申し上げることが余りないのですが、一つ思うのは、交流結合というお話が出ましたが、同時に多元性といいますか。相対するものであっても包容できるような叡智、社会の仕組みをつくっていけるようなビジョン。そういうものをメンバーの皆さんと考えていければいいのではないかと考えております。

私の方からは手短に、以上でございます。ありがとうございます。

○大西座長 どうもありがとうございました。

中西委員、お願いします。

○中西委員 大学の所用がどうしても変えられずに、遅くなりまして、失礼いたしました。

大変光栄であることは確かなのですが、私は国際政治とか日本の安全保障とかをやっておりまして、この数年間、幾つか政府の会議に出させていただいたことがあります、いろいろと提言を出して、実行されたものもありますが、実行されないものの方が多いような気がしますので、なかなか大変な仕事だなと思いつつ、今回お引き受けをさせていただきました。

お引き受けをさせていただいた大きな理由は、恐らく野田総理の心の中にあっただと思います、30 年前に大平総理が政策研究会をつくられて、10 年余り前に小淵総理が 21 世紀ビジョンをつくられたということで、やはりこういう長期的な視野で日本の先行きを考えるということは重要な仕事だということだと思いますので、この政権でそういうことをされるということで、お役に立てればという観点から、参加させていただいた次第です。

半年ほどの間に 2050 年まで考えろというのは、かなり無謀なアサインメントを言われているという気が正直しますが、私を除いて、皆様は立派な先生方ですので、皆様の御意

見を聞きながらまとめていきたいと思います。

私の個人的な視野としては、21世紀の世界は国際政治が過去100年か200年くらい見てきたよりも、もっと大きな人類史的な変化の時代で、恐らく西洋中心の世界というものからは変わっていているだろうと思います。そういう中で、現在、日本が持ってきた明治以来のアイデンティティからもう少し視野を広げて、中世とか近世とか、そういう時代に日本が世界とどういう交流を持ってきたかということも含めて、アイデンティティのとらえ直しをする。

その中で、日本の国力とか、日本人とは何かとか、日本と世界は何かということを考えていくようなことが必要なのかと思っていますが、まだまだ抽象的で皆さんの意見を聞きながら、自分の意見を考えて、この分科会なり部会で貢献できればと思っています。よろしく願いいたします。

○大西座長 どうもありがとうございました。

栗栖委員、お願いします。

○栗栖委員 国際政治学を専門としております。

国際関係論、国際政治学では広い意味で、安全とは何か。つまり狭い意味での国家の安全保障以外の分野にも安全の概念を適用するというのを研究しております。また、日本の多国間外交、特に国連の場での政策決定への関与等も研究しておりますし、最近では政策アイデアが出されて、それがいかに実際の政治のプロセスで吸い上げられたり、失敗するのか。どういう条件の下でそれは成功したり、失敗するのかということも研究しております。そういう意味でも、この場にお招きいただきまして、自分自身の研究にとっても参考になると非常に思っております。微力ではありますが、できる限り貢献できればと思っています。

先ほど総理の方から、日本がフロントランナーになる、世界のモデルになるというお話がありましたけれども、平和、安全の分野におきましては、日本にとって相当の努力を要するものではないかと率直に思っております。日本自身が国際政治の大きな変化の中に置かれて、流されているようなところで、非常に大きなパワーの変化。特にアジア太平洋でそれが起きているわけですし、そうしますと、単に日本の外交だけでは解決できない問題であります。

その意味で、今回の分科会、部会の構成が非常に面白いなと思いましたが、日本自身の国力がどういうふうになるのかということ自身、その問題によって実際に日本の外交がどうなるのか。安全をどう考えるのかということとも関わってくるわけで、その意味で少子化の問題であるとか、経済であるとか、そういった他の部会との議論の関係性が、外交安全保障、平和の問題を考える上で重要になってくるのではないかと考えております。ですので、是非横断的に議論をさせていただければと思っています。

私の考えですけれども、もはや大国ではなくなりつつある日本が率直にございまして、その中でどのようにして外交力を発揮して、自国の安全、平和というのを高めていくのか

ということを考えますと、相当のアイデア、工夫、装置というものが必要になるのだと思います。

それに関しては、一つにはこれまでの日本の強みというのをもう一回発掘して、例えば ODA を使うかとか、そういったことも入ってくるでしょうし、もう一つは、これから日本だけで一国だけで何かをすることは非常に難しいので、いかに仲間をつくっていくのかという、その仲間づくりの国際政治が大事になってくるのではないかと考えております。

以上です。

○大西座長 どうもありがとうございました。

以上、8 人の方が部会長、部会長代理ということで、その下に 12～14 人の部会のメンバーがいて、これから議論をしていただきます。その中には、視覚と聴覚に障害のある福島智先生も、幸福の部会に参加していただいている、早速文書で意見を寄せていただいているということで、非常に皆さんに熱心に取り組んでいただいているということで、これからの議論の展開を楽しみにしたいと存じます。

今日は総理にお出でいただいておりますが、時間の関係で、ここで御退席されるということでございます。

○野田総理大臣 すみません。よろしく願いいたします。どうもありがとうございます。

(野田総理大臣退室)

○大西座長 それでは、残り、今日は 19 時半まで、あと 40 分ほど時間があるわけでありまして、自由な意見交換というふうにしたいと思っております。

この席には、古川大臣を始め、石田副大臣、大串政務官にも同席していただいておりますので、お三人の方にも御発言をいただきながら、進めていきたいと思っておりますが、もしよかったですら。

○古川国家戦略担当大臣 皆さん緊張されているようなので、リラックスして自由に、さっきも総理がおっしゃったように、やんちゃにどんどん言っていただければと思います。よろしく願います。

○大西座長 石田副大臣、何かありましたら。

○石田副大臣 先ほど総理からお話がありましたが、大西先生と小林先生以外は私よりもはるかに若い人のお集まりだと思っております。50 年先というお話がありまして、今、2070 年の社会保障について、将来の社会保障についての問題をいろいろと議論されておりますが、70 年先とか 60 年先とかいうのは、なかなか予測しがたいことです。

しかし、私は恐らくそのときは生きていないと思いますが、実際には日本という国がどういう国かということをしつかり 50 年先、60 年先を見つめてやっていく必要があると思っております。そういう意味から若い世代の皆さん方の御意見は大変貴重だと思っております。このフロンティア分科会への期待を大にしておりますので、どうぞよろしく願います。

○大西座長 大串政務官、どうぞ。

○大串政務官 政務官の大串でございます。どうぞよろしく申し上げます。

フロンティアという名前にふさわしく、大西先生から 2050 年を置いて、そこからバックキャストするという方法論をいただきました。自分の頭でずっと常に同じような視点から考えても、あまり新しいアイデアは出てこないだろうなと思って、視点を変えてみるというのが必要かなといつも思っています。

この間、ふと思いついたのが、私は子どもが中二の男の子と中一の女の子がいるのですが、その視点でこれからいろいろと考えてみようかなという気になりまして、そうすると全然違った世の中に、ひょっとしたら見えるのではないかと。私がぱっと見て、2050 年を考えると言ったときに、すごく先のことだな、わからないなというようなイメージになるわけですが、子どもの立場からしてみると、2050 年は俺の人生じゃん、こんな感じではないかという気もしまして、そういう目線で私もいろいろと考えながら、議論に参加させていただきたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

○大西座長 ありがとうございます。

本当にあとは自由ということで、進め方についての御意見、あるいはまとめの視点はまだ早いかもしれませんが、短期決戦なのでこういう視点が大事だと。今の御発言の中にもありましたけれども、今日は特に議題を定めずに自由に意見交換ができればと思います。どうぞ。

○柳川委員 今、大串政務官のお話や座長からもお話がありましたが、視点をどうするかというのは非常に重要だと思います。私が思いますのは、2050 年、2025 年の辺りに来たときに、本来この報告書は「日本は」と、主語が日本ではだめだと思うんです。これは「世界は」あるいは少なくとも「アジアは」。世界に対してどういうメッセージを発していくかということをしていってこそ、初めて日本の長期的な展望が開けるのだと思います。

そういう意味では、世界の視点、全部の報告書を「世界は」という方向でやるのはなかなか難しいかもしれませんが、少なくともそういう感覚あるいは視点を我々はいつもキープしながらやっていく必要があるのではないかと。そうすると少なくとも考えなければいけないことは、海外から見て日本がどういうふうに見えるのかという、海外の声を積極的にもう少し取り入れていく必要があるのではないかと。勿論、それをそのまま我々が聞けばいいということではないんですが、日本の 25 年、50 年は海外からどう見られているのかということが 1 つです。

もう一つは、恐らくヨーロッパ、あるいは座長からお話のあったアジア、20 年後 50 年後には非常に大きな変化をするわけですから、海外が実際にどういう変化を起こすのかという辺りの実態把握みたいなことも十分に踏まえる必要があるのかなとっております。

○荻部委員 今の視点の問題もとても重要だと思うんですけれども、もう一つは、どういう読者を想定するかだと思います。やたら難しいことばかりをやって読みにくいものになったら、せっかくの議論をまとめて公開していく意味がなくなってしまう。私も物を書くときにいつも悩むのですが、普通の学者が書いている文章で書いてしまったら、みんな読

んでくれない。そこをもうちょっと普通の人が読めるようなものにする工夫をしたいなど、あくまでも自己規律として思います。

もう一つは、例えば先ほど話が出た小渕内閣の 21 世紀日本の構想は、かなりよくできているんですね。ところがあれは実は、勿論、関係者には冊子で配られたと思いますけれども、今は一応インターネットで公開はされているんですが、ダウンロードすると、これくらいの量になって、全部読む人はだれもいない。これはせっかくいい内容のものをつくったのに、残念だと思うんです。

ですから、別に量はどういうふうになっても構わないと思います。だから短くしろとか、そういうことはありませんけれども、少なくとも書物の形で刊行して残すという手立てを何らか考えた方がいいのではないのでしょうかと思います。

○永久事務局長 私も極めて同感で、報告書にありがちな中身がわかりにくいものではなくて、全体として読み物として、わくわくしながら読めるようなものに仕上がっていったらいいなと思っています。私はたまたま PHP から来ていますけれども、そうした本として出すようなことも想定しながら、お書きいただければとずっと感じておりました。

○大西座長 今、お書きいただくという前提での話がありましたが、これも大事な点で、この分科会、部会は少しそこは皆さんに汗をかいていただくということを想定していますので、4月くらいが佳境になりますね。大学の先生にとっては、ちょうど年度が変わって、私の経験だと余り忙しくない時期かなと思っています。そうはいかないですか。それはそれぞれのスケジュールがあると思いますけれども、その範囲で是非御協力をいただきたいと思っています。

ほかに何か御発言がありましたら、どうぞ。

○中西委員 先ほど座長からもお話があったように、短期決戦であるというのはなかなか大変だなという気が正直しています。それぞれの部会についても、集めていただいているメンバーはそれぞれ優れた方だと思いますので、それぞれの持っている考え方の棚卸で、それなりのものになるかとは思いますが、本当であれば、せっかくこういうものを時間をかけてやる以上は、それにプラスアルファをして、それぞれの先生方の見識を融合して、先ほどのお話もありましたが、そこからもうちょっとケミストリーでつくらないと、読んで意味のあるものにするというのは、なかなか難しいだろうと思います。

それをフェイスブックとか、そういうものを含めて議論されるということですが、この時間的あるいはいろいろな制約の中で、それぞれの先生の考えを継ぎ足したものではないプラスアルファをどのようにつくっていくかということについては、座長を含め、事務方にもいろいろとお考えをいただいて、是非そのための機会というものをつくっていただければと思います。

○大西座長 提言的なところは全体で共有しないといけないので、それなりの合意が要ると思いますが、それを裏づけるエビデンスを含めた、あるいはそれぞれの御見解というのは、少し個性が出ると思いますか、それぞれの主張があってもいいと思います。全体のレ

ポートが少し分かれていて、個人の説が少し出ている。それはほかの方は必ずしも合意しないけれども、尊重するというパートと全体が合意できるところがある。これが全体の定言的なエッセンスということになると思います。今の御発言から、その編集の仕方の工夫も必要かなと思ったところです。

どうぞ。

○隠岐委員 少しベーシックな質問かもしれませんが、今のお話からすると、提言のところは集約して一つのラインでまとめるとして、ほかのところは、例えば未来が多元化するというか、こうなったらこうなるかもしれないと思っているとか、こうなったらこうかもしれないと思っているという記述が許されるようなものも考えていらっしゃるということでしょうか。

○大西座長 シナリオが複数あるという意味ですね。

○隠岐委員 はい。私が特に思ったのは、経済的に成功するパターンと、書いていいのかわからないけれども、軟着陸をするような、だけれども、文化的に豊かな国だとか、いろいろなパターンがあるかなと思っておりまして、そういうことです。

○大西座長 どうぞ。

○古川国家戦略担当大臣 今のはすごく面白いと思います。最終的にはまとめていただいて、そのビジョンではこれは絶望になってしまうので、例えば皆さんの途中の議論の中で幾つかのシナリオを描いてみると。そういうのを世の中に問うてみると。こういうふうになったらこうなりますと。そういうのをベースにして、最終にまとめていただくのに、その中でこういうあらまほしきところに目指すということもあると思いますから、やり方は是非柔軟に考えていただいて、そこは座長や皆さんに考えていただきたいんですけども、私のイメージでは最後の結果だけが世の中に出るというよりも、できるだけ途中の皆さんの議論にいろいろな人たちを巻き込んでもらって、みんなで日本の未来のことを考えてもらいたいんです。

私は今の政治状況を見ていて思うのは、日本の場合はまだまだ多くの方が観客なんです。私は何年前かにワシントンの CSIS のリーダーシップ・プログラムに出たときに、こんな話を聞きました。アメリカ人は小さいころから、アメリカ人である限りは、だれだって大統領になる可能性はあるわけですね。それこそ一人ひとりをこの国の将来のリーダーになるかしないという意識を持たせるような教育をやっているという話を聞いたことがあります。そういうことが言わば、当事者意識を持っているということではないかと思います。

日本の場合はどうしても観客とプレーヤーに分かれているような、国が何かをやれというときには、国というのも抽象的なものがあるわけではなくて、その後ろには国民がいるんですけども、そこがイメージできていないところもあると思うので、是非この皆さんの議論を通じて、特に若い世代の一人でも多くの人を巻き込んでもらいたいんです。

ですから、さっきどういう読者かという話がありましたが、若い世代の人たちが次の時代をつくるんですから、大西先生がいらっしゃいますが、ほぼでき上がった方々はもうい

いんです。今そんなことを言っていたら、やはり未来は次の世代のものなのです。大串政務官もいみじくも同じことを言われたんですが、今の小学生とか中学生くらいがある意味で夢を持てるように、そういう人たちの視点で、彼らがそうだなと。こういう日本をつくるために自分も頑張ろうと、それこそ子どもたちに伝えられるような、そういう感じで最終的なものをまとめていただいたらいいのではないかと。

偉い立派な先生方が見て、すばらしい報告書ではないかと言っても、若い人たちが見て、自分たちの感覚と全然違うなど。正直に言って、私は全く今のバブル崩壊以後に生まれた人たちとそれ以前の人たちは、マインド設定が全く違うんだと思います。例えば失われた20年と言っていますけれども、それは過去のいい時代を経験した人間だから失われたと言うだけで、生まれたときからこういう状況で育ってきた人から見たら、何が失われたかなんて、これが当たり前だと思ってしまっているところがあるわけです。

むしろ、そういう人たちにここからこういうふうによれば、夢が持てるんだと。今の若い人たちを見ると、上の世代を見ると、昔はよかったとか、あるいは昔からの既得権を何とか維持したいみたいな、そういうふうにはしか見えないから、ある種絶望的になるとか、自分たちのことを全然わかってくれないではないか。その辺が世代間の格差にも出ているのではないかと。

そういうふうにはなくて、むしろ若い世代に今こそ本当にあなたたちがこの国の未来の主人公だし、あなたたちにいいように、あなたたちが頑張るやすすいように、そのためにその上の世代の我々、親の世代はやっていくんだよというメッセージを是非ここから送りたいなど。私などはそう思っているんで、そんな視点でかなり自由にいろいろなことをやっていただければと思います。

○大西座長　どうぞ。

○阿部委員　現実的なお話をもう少しお話しさせていただければなと思ったのですが、実際に政策提言というお話をなさいましたが、確かにこれは2025年ですとか、かなり先の話ですので、これがすぐにどうのこうのという実際の政策につながることを意図しているものではないにしても、例えば大学まで全部無償にするとかいう教育改革を行いますみたいな、かなり具体的な政策提言とかいうものもどンドン話していてもいいのでしょうか。

この場では関係省庁の方々も入っていませんし、若手の方は入っていますけれども、そういうような長期的ビジョンというものを特に幸福の分野でスペクトル、社会保障の分野と絡まってきますので、税と社会保障の一体改革の方向性や整合性をどうするのか。そういうことを意図して書かなければいけないものではないのでしょうか。それとも全く自由にやってしまっ構わないということでしょうか。

○古川国家戦略担当大臣　もうそこは自由に議論をしてください。ただ、最後にそこは整理をしていかなければいけないんですね。ですから、議論の前からこういうふうにしてほしいと枠は設けなくて、むしろそこは自由に議論をしていただいて、最終的なところでどう整理していくかについては、国家戦略会議もありまして、このところでは足元から

とにかく 2020 年くらいまで、目の前のところをとにかく今年、来年、数年どうするんだという、かなり具体的なことを議論して決めてやっていこうと思っています。

皆さんの議論の中で、目の前でやればいいというアイデアがあれば、それを逆に取り込んでいって、そこに入れればいしし、バッティングをしそうとかいうことになったら、そこは再度調整をしていかなければいけないですから、最初から余りそのところを気にして議論をしていくと、自分の頭の中で枠をつくってしまうことになりますから、今、大事なことは先ほどの皆さん方のお話、荻部先生や中西先生からお話があったように、歴史的な大転換期だと思っています。

中西先生のお話にあったと思いますけれども、産業革命と同時に世界は西洋的な発想や考え方が広がっていった、それが 20 世紀までだったのですが、ある意味で 21 世紀は逆に言うと、それだけではなかなかブレイクスルーできない。例えば地球環境の問題であるとか、さまざまな問題がブレイクスルーできないというところに聞いて、新しい発想が求められている。

新しい発想というところで言うと、日本にはそういうところで十分リーダーシップを取れるチャンスがあるのではないかと思います。先ほど柳川先生がおっしゃった「世界は」というのは、世界の中で日本はこうするんだという視点を出していく。日本の中だけで考えるのではなくて、これからの世界の中で日本はどういう役割を果たしていくのか。その中で日本の在り方も考えていただければ、私はそういう中で新しい世界に対してリードしけるメッセージができるのではないかと思います。

長くなって恐縮ですが、私は 4 年前にテーブル・フォー・ツーという NPO を立ち上げて活動しています。これはどういうものかという、グローバルに大きな問題としてある、途上国の飢餓、貧困、先進国の肥満、生活習慣病。これをカロリーという視点で見ると、一方はカロリーが足りな過ぎで、一方はカロリーを摂り過ぎなんです。これを世界で同時に調整する仕組みとして始めたのが、テーブル・フォー・ツーです。

具体的に今やっている一番のメインは、社員食堂などでヘルシーなカロリーを抑えた食事を提供してもらって、そのヘルシーな食事に 20 円乗せて、その 20 円を寄附してもらって、これをアフリカのミレニアム・プロミスというジェフリー・サックスがやっているところとか、あるいは WFP などと組んで、給食をつくる。そうすると大体 20 円がそこで 1 食分の給食ができる。ですから、テーブル・フォー・ツーというのは、見えないけれども、自分が食べるときに先進国の人たちがヘルシーな食事をしたら、途上国の人が一食食べられる。

これは Win-Win なんです。グローバルな課題を解決するソリューションが求められている。しかし、一方的なドネーションという中で、サステイナブルではないんです。例えば経済が悪くなると、すぐにそういうのが止められたりする。サステイナブルに物事をさまざまなグローバルな課題を解決していくソリューションを見つけなければいけない。

例えばビル・ゲイツがクリエイティブ・キャピタリズムということを書いて、資本主義

の仕組みの中にそうした問題を解決できる仕組みをビルトインしようというので、彼自身がやっているレッドキャンペーンという U2 のボーカリストのボノと組んで、例えば赤いアイポッドが売れば売れるほど、その売上げの一部をアフリカの支援に回す。ビジネスとして成功をすれば、するほど、アフリカに支援がたくさんできるということをやっています。

私が仲間と始めたテーブル・フォー・ツーなども一つの Win-Win の仕組みです。日本というのは、そういう世界の抱えている問題を対立ではなくて、みんながサステイナブルの形で解決できるようなモデルを例えば社会で実現していく。そんなことでいいと思います。是非そういう意味では、自由に枠にとらわれないで議論をしていただければと思います。

○大西座長 ありがとうございます。

フロンティア分科会のまとめ役として発言すれば、私も自由に議論をしていいと思っています。ただ、論理は大事だと。なぜ大学の学費を無料化しなければいけないのかということは、我々のレポートの中できちんと位置づけられていないといけないと思います。結論として、そういう政策が必要ということであれば、これはいつするかということはいずれに書けないと思いますが、そういう提言もあり得る。

ただ、さっき言ったように、日本再生戦略が年央につくられることになっていて、それは古川大臣を中心におまとめになるということで、そこにインプットとして、この提言とかが入れられるのですが、そこにどう扱われるかというのは、恐らく別の論理が働くのだらうと思います。そこは私は割り切って考えているわけですが、その日本再生戦略に対しては、我々はある意味で客観的な立場に立てるので、それをどうまとめられたかということについては、一人の日本人として、どう評価するかというのは留保できるということだと思います。

したがって、この分科会の報告書については、きちんと議論をして、論理の流れをきちんとたどって、その結論として一定の提言が出たら、それは示していこうと私は思っています。そういう議論はしていただいていた方がいいということでもあります。ただ、この展開でもわかるように、古川大臣もなかなか手ごわい論客だし、大串政務官もそうなので、まずこの辺りと議論をしないと日の目を見ないということかもしれませんので、張り切ってやってください。

どうぞ。

○上村委員 2点あります。今までのお話を伺っていて、特に「幸福のフロンティア部会」は所得 30 万政策を多分扱うと思うんですけども、特に子ども向け、もしくは非常に若い世代に対しても書くんだということはあると思いますが、やはり高齢者の方々もわかっていただくような報告書。もしくは共感していただくということが極めて大事で、なぜなら圧倒的に人口の構成が彼らの方が多いわけです。結局は民主主義国家ですから、有権者は圧倒的に彼らなので、そこを納得していただくことは非常に大事なポイントだと思います。

もう一つ、この議論のアプローチとして、現在の状況から日本の将来予測を行うというところを、まず最初に1番目に書いてあります。ここで質問ですが、これはどの程度の将来予測を念頭に置けばいいのか。つまり定量的な話なのか、部会によっては定性的にならざるを得ない部会もあるわけです。例えば財政の話だと将来予測はある程度は出てくるんですけれども、どういう将来予測をここは描いていけばいいのかというのが私の1つの質問です。

○大西座長 永久さん、どうですか。

○永久事務局長 深くまでは考えていなかったんですけれども、定量的に必要なものは当然必要になってくると思います。特に財政の問題などは、それをやらないと話が進まないということになるかと思います。一方で「平和のフロンティア部会」は、そうした定量的なものが必要かといったら、必ずしもそうではなくて、むしろ定性的な将来予想みたいなことになると思います。ですから、部会によってそれぞれ考え方は違うと思いますが、必要に応じて御議論をいただければと思っています。

それをなぜやるかと言ったら、結局は今までの状況が続くとどうなってしまうのかということ想定してみたいと。それを避けるため、あるいはそれでいいのかもしれないが、多分ないと思いますが、それを避けるためにどういうことをやっていくかというのが、あるべき姿を考えたときに、検討していかなければならないソリューションのところが出てくるのだらうと思います。そういう意味で、必要に応じてやっていただければ私は思っています。

○上村委員 そのときに、特に「幸福のフロンティア部会」と「繁栄のフロンティア部会」は非常に関わってくると思います。つまり、成長戦略がないと、財政の展望はなかなか見渡せないということです。恐らく日本の将来予測は部会によってオーバーラップするところがあるのではないかという気がするんですが、いかがでしょうか。

○永久事務局長 まさにそのとおりで、先ほどもお話がありましたが、国力ですなわち平和に対する日本の貢献度、あるいは力の関係が決まってくるなど、まさにそれぞれが影響すると思います。また、荻部委員のお話にもありましたが、そうした各フロンティアに対して、「叡智のフロンティア部会」の持っているものがインフラとして使われていくということもあると思います。

ですから、オーバーラップするような議論を是非ここでやっていただきたいと思っています。今まで縦割りで議論がなされてきた傾向があるかと思いますが、それを取っ払ったら横の議論もこの場でやっていただければと思っています。

○大西座長 どうぞ。

○阿部委員 定量的な予測というのは、実際に私たちの方でモデルをつくって回すとか、そこまで考えていらっしゃるのですか。それをこのタイムフレームでやれとおっしゃっているのでしょうか。

○大西座長 人口問題研究所も昨日発表された数字がありますね。2050年の日本の状態を

示すデータを出しているところが、国内あるいは国外で幾つかあると思います。あるいはもうちょっとバックキャスティングの意味でのあるべき将来像を提示しているのもあると。そういうものについて整理して、議論の中に取り入れていかないと、世の中の議論と絡んでいかないとと思います。

ここで独自に定量作業をやるかどうかというのは、準備段階で議論もしているのですが、一つの危険性として、そこでもうすべてを決めるということになると、まさに定量作業もさじ加減というか、モデルのつくり方からデータの入れ方でいろいろな変化が起こるわけですね。そこだけにみんなが集中してしまうのは適当ではないと。ただ、全くそれぞれが勝手な将来の数値を前提として議論をしてもかみ合わないです。そこはどういうデータをみんな共有のデータとして、ベースとして使うのか。

私のさっきの整理で行くと、トレンドをある程度踏まえながら、あるべき姿という議論をかませて、バックキャスティングの将来像を描こうと申し上げたのですが、そのベースになるところは、ある程度共通した見通しがないと議論はかみ合わないと思います。そこは既存の将来像を描いている定量的な作業などをどういうものを使っていくかという辺りも、それぞれの部会で議論をしてある程度議論をしていただくとか、勿論、提供をしていただくということも必要なのかなと思っていますが、独自にやるかどうかについては、もし本当に必要があれば、考えたいと思います。

○古川国家戦略担当大臣 もし本当に試算とか皆さんのやりたいこと等があれば、経済財政部局の方がそういうバックオフィスとして、皆さんのお手伝いはさせていただきますので、皆様が自分でやるというよりも、こういう試算をやってみてくれと言われれば、できる限りはバックアップをさせていただきますので、そこは座長の下で御指示をいただければ、やれるだけのことはやらせていただきたいと思います。

○大西座長 どうぞ。

○隠岐委員 すごく実務的ですが、今のお話で思ったのですが、それぞれの部会で例えば使っていたデータとか、または何か新しいものを出していただくなら、みんなで共有した方が、いいと思います。

ただ、同時にストックしておいて、キーワードで検索できる形もあるといいかなと思うんですが、その辺は皆様はどんなふうにお考えでしょうか。

○大西座長 今の点はフロンティア分科会のサイトをつくっておいて、そこにそれぞれの部会で出された資料については、PDFで張っておいて、そこを見れるというふうにはできると思います。その場合は公開資料になります。当然、資料は公開するので、それはできるわけです。

○隠岐委員 関心に応じてタグで探せるような感じがあるとすごくいいと思いました。

○小林座長代理 私は座長代理ということで、きつとりまとめのお世話をするのかなと思っています。ただ、今日は一巡しただけで、共通の視点とか共通の材料があったような気がして、結論的にはすごくほっとしたというか、うれしく思いました。

幾つか申し上げますと、例えば交流結合やコミュニティの話がありましたし、古川大臣のお話がありましたけれども、違うものが合わさって新しいものをつくっていくというのは、日本の強みだと思います。その辺はいろいろな方が関心を寄せていらっしゃるのかなと思いました。これは環境だと生態学でよく共進化と言いますね。いろいろなマルチエージェントでみんなを育てて新しいものをつくっていってしまう。そういう姿なので、割と日本になじみやすいかなという感じがしました。

もう一つ感銘を受けましたのは、日本だけの話ではなくて、世界を経営する日本。世界に生かさせていただくわけですから、世界をどうしたいのかという感じもすごくあって、頼もしいなど。最近の若い方と言ったら老人くさくなってよくないですけども、やはり元気だなと思いました。

もう一点ですけども、割と共通していたのは、外国のお仲間づくりみたいな、私自身も言わせていただきましたが、そういう発想もすごくあって、そういう時代なのかなと。世界を経営する日本と非常に近いと思いますが、共進化とも近いと思いますが、私の目が色眼鏡で曇っているのかもしれませんが、結構面白い共通するところがあったと思うので、そういう意味では短くてもプロダクティブな議論というのはあるのではないかなという気が今日はしました。

○大西座長 大体よろしいでしょうか。1回目ということで意見交換をざっくばらんにしていただいて、これから部会の議論に入っていくということで、スケジュールが非常に心配ですので、スケジュールについては4月までの一通りの議論をまとめるところまであらかじめ決めてしまって、御提示するという格好で、予定が立つような格好で進めていきたいと思います。部会及び分科会の日程については、近々連絡をさせていただきます。

それでは、最後に改めて、大臣からおまとめをいただきたいと思います。

○古川国家戦略担当大臣 今日は本当に遅い時間からありがとうございました。

初回ということもあって、あるいは選ばれた方々、皆さんが紳士淑女なのかもしれませんが、先ほどの繰り返しになりますけれども、是非闊達に自由に御議論をいただければと思っています。

私はこの日本はとにかくこれまでの延長線上の中で言うと、なかなか明るい未来は開けてこない。歴史的に大きな、世界的に見ても転換期だと思いますから、ここは次の時代に向かって、過去にどこかで区切りを付けて、次の時代に飛ばなければいけないんだと思っています。しかし、その間には深い溝があって、落ちるとどこまで落ちるかわからないという怖さがある。そこを飛ぶ勇氣。

しかし、これを飛ばない限りは逆に言えば、未来は開けない。私はそういう意味で、あらゆる面で我々の意識から含めて、アウト・オブ・ボックスの発想。そういう中からイノベーションというのは生まれてくる。イノベーションというと科学技術だけではなくて、我々の発想からして、すべてにイノベーションが必要だと思いますが、是非そういうものをここで実現をしていただきたいと思います。

私は 46 歳です。去年、日経新聞が 1 月から 45 歳という特集をやっていました。日本のちょうど中心が 45 歳ということで、私はまさにそこになるんですけども、私自身、自分たちの世代の役割は何かと思っていると言え、それは大きな時代の転換期にあって、言わばこれまでの時代を生きていた先輩たちの世代。その感覚はわかります。私も大学に入って、卒業して就職するころはちょうどバブルの絶頂で、就職して 2 年目にバブルが崩壊して、その後はこういう状況です。

一方で、若い世代の全然そういうのとは無縁の人たちの感覚も何となくわかります。大事なことは、先ほど上村先生からも話があったけれども、私は世代間対立にしないことだと思います。企業などだと時代に合わないから切り捨てるということが出来ますが、国は企業と違って切り捨てられないんです。それは古い時代に生きていた人だろうと、新しい時代だろうと、みんなで次の時代にわたっていかなければいけないんです。

私は自分たち世代の役割は世代間対立にしないで、みんなで怖いかもしれないけれども、次の時代にこの大きな溝をジャンプすると。一緒になってジャンプする。だれかを置いていくということにはしないで、ジャンプをしていくことは大事だと思います。そういう一緒にジャンプしようという勇気が出てくるような、是非そういうものをここの皆さんの議論の中で書いていただければ、それは日本の皆さんに勇気を与えることにもなるし、世界に対して、日本から大きなメッセージを発することが出来る。世界も今、混迷していますから、是非そういう意味で世界をリードする。さっき本にしてというお話がありましたが、日本語だけではなくて、英語や中国語やスペイン語、世界を発信する。それくらいのつもりでおまとめをいただきたいと思いますので、よろしく願いいたします。期待をいたしております。

○大西座長 随分発破をかけられて最後に終わることになりますが、短期で今年前半のエネルギーを集中していただいて、よろしく願いいたします。

それでは、本日の会議については、以上とさせていただきます。これから各部会で皆さんを中心に議論を進めていただきますが、どうぞよろしく願いいたします。

日程については事務局から御連絡をさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

今日はどうもありがとうございました。

(終了時刻 19 : 30)